



日本記者クラブ

記者ゼミ 第3回

アジア・中国編③

複雑さを増す中国の都市・農村の格差問題

東京大学大学院准教授

阿古 智子 氏

2013年7月11日

©公益社団法人 日本記者クラブ

司会：吉田克二・特別企画委員 阿古さんは、足で稼ぐといいますか、フィールドワークで、足元から中国を見ている方です。新潮社から『貧者を喰らう国』という本を出されております。きょうは「複雑さを増す中国の都市・農村の格差問題」と題して、ご自身が撮影された写真を紹介いただきながら、お話しいただきます。

注：写真は添付していません。使われた個所を<写真>と表示しました。

無謀な開発で消される街並み

阿古智子・東京大学大学院准教授 私は、分野で言うと政治もかかわるのですが、社会学の手法でいろいろフィールドワークをやっていくのが自分の持ち味だと思っているのです。これまで主に農村に入って、そこのコミュニティの人間関係とか、公共の事業にかかわって政府とのかかわりがどうなっているかとか、農村から都市に出かけていく出稼ぎ労働者の動きですとか、そういうものを見てきました。

冒頭に、写真を何枚かお見せして、5月初めに行なった山東省での問題を紹介したいのです。中国は特殊な戸籍制度があって、農村と都市は人工的に区分されていて、農村の戸籍を持っている人々はいろんな意味でかなり不利な条件に置かれているのですけれども、中国のそういう特殊な側面も紹介したいと思います。

<写真>奥にお寺が映っていますが、古い遺跡や文化財ではなく、古いようにみえるお寺を新しくつくったものです。手前に瓦れきの山があって、木が倒されています。ここは農民の人たちが住んでいた家を壊したのです。明末とか清朝の時代に建てられた古いおうちがたくさん並んでいて、680戸ぐらいの農家が強制的に立ち退かされました。濟寧市というところで、山東省の中でも結構所得が低い地域に当たるそうです。

<写真>一角に板が置かれ、達筆の字が書いてあります。減速してください、大型の機械や車両は減速して通行してください、それによって振動を防止してください、古い建築がありますから、と書いてある。680戸の農家が立ち退かされたのですけれども、2軒、立ち退かないといって頑張っている農家の一つです。

私はなぜここに行ったかというと、実は知り合いの、北京の大学で教えている教授の実家なのです。その教授いわく、もう80歳を超えてる自分のお父さん、お母さんが住んでいる家がなくなると、ここ歴史はもう見えなくなってしまう。

細々と普通の庶民の人たちが積み上げてきた歴史が消えてしまう。

立ち退かされた人々はすごく悪い条件で立ち退かされている。新しく住むところは準備されているのですが、そこに入るためにもお金を払わなければならず、立ち退き料では足りず、そこに入れない人もいるのです。今まで農業をやっていた人々も、自分の土地がすごく減ってしまいましたので、野菜や食べ物も外から買ってこなければいけません。慣れない環境に置かれ、憤りと不安で耐えられなくなり自殺した人もいます。

<写真>立ち退きを拒んで残っている家ですが、知り合いの教授の両親と、その長男の夫婦、4人が残って住んでいます。家屋自体の保存状況はそんなによくない。老朽化しているし、清朝の時代に建てたものを建て増したりしているので、あまり状況がよくないです。

すごく慎ましい生活をしていて、壁に書かれた毛沢東時代からのスローガンがまだ残っていました。

どう考えても、家屋に文化財の価値はないと私は思ったのですけれども、これみよがしに小さい金色の看板で、「〇〇地区文化財」と書いてある。なぜかというと、私の知り合いの教授、つまりこの家の次男ですが、彼は中央政府やメディアに結構知り合いがいて、圧力をかけることができるのです。地元政府もここだけは壊せないので。その家だけはつぶつと残っていて、なおかつ文化財というプレートがつけてあって、非常に不自然です。

普通の庶民の、ささやかに積み重ねてきた文化とか生活が、一瞬にして無謀な開発によって消し去られていく。そういうことをどうにかアピールしたい、だから、お父さん、お母さんに、何とか頑張ってここに居続けるようにと、その方はおっしゃっているのです。ただ、ご両親はもう80歳も過ぎていますし、そこまでいけるかどうかわからない。

<写真>その農家から見える灰色の建物は、新しく建てている低層マンションです。この辺は古いおうちが建ち並ぶ風情のある街並みがあったそうなのです。そういう街並みを、暴力団みたいな人が入り込んで一斉に壊して、古い建物に模した低層のマンションを建てているのです。建てているのはどこの不動産会社かと聞くと、浙江省の不動産会社だというのです。外から不動産会社が入ってきて開発をしている。

なおかつ不思議なのは、買う人がいない。だから、工事がストップしてしまっているというので

す。何のためにそんな不動産開発をするのか。「誰も得しないんじゃないですか」と聞くと、開発業者自身も地方政府と手を組み、地方政府は借金をしてこういう事業を進める。借金が返せなくなつても、だれも責任をとらない。いま、シャドーバンкиングとか話題になっていますけれども、そういうところからお金を取り、不良債権化していくということが裏にあるようです。

跡地の公園に観光客はチラホラ

私が中国で調査するときは、最初は地元の政府と連絡をとらないようにしています。政府にアレンジしてもらうと、見せたくないところは見せないで、見せたいところしか連れていってくれません。今回も先生を通して知り合いの方々に会うという感じでやっていたのですけれども、役人は情報が入ってきたら飛んできます。今回も私たちが到着すると、すぐにその地元の鎮から飛んできました。鎮は村の上の行政単位です。せっかく日本から来たのですから案内させてくださいと、立ち退いた後つくった公園とか、博物館とか美術館を半日ぐらいかけて、車でざっと回ったのです。

もともとこの地域は、人々は石灰岩を掘って生活していた。掘り尽くした後を「地質公園」にしています。きれいですけれども、私が行った労働節というゴールデンウイーク中の休日でも、観光客はちらほらと数えるほどしかいなかった。

車がほとんど通っていないのに広い道路をつくって、地質公園の周りを広大に緑化して、人工の池をつくっている。まだ開発中の軍事博物館では、屋外に解放軍が使わなくなった飛行機とか、戦車を置いています。いま中国で「赤色観光」がはやっている。共産党の華々しい歴史、抗日戦争とか、国民党との戦いの軌跡を紹介するのですが、ここ博物館でもそういうものを展示している。この地域は、山東省では古い人骨や焼き物も発掘される。そういうものを展示した博物館もありました。

歴史の専門家も一緒にいらしたので聞いたのですけれども、「本当のものは少ないよ。ほとんどにせものを並べてあるよ」と、そつと言つてくれた。すごく広い敷地にそういうものをつくるために、農民の人たちを強制的に立ち退かせる。

清明節という、日本のお彼岸にあたるお休みの時期には、「去年は30万人観光客が来た。今年はちょっと少なくなったけど、22万人来ましたよ。だから、ここを国際観光都市にする。目玉にする」と、鎮の書記が誇らしくおっしゃる。けれ

ども、一緒に行った北京の先生は「そんなに来るわけないだろ」と。

清明節はお墓参りをするときです。赤色観光ですから、共産党の革命烈士、戦争で亡くなった人たちにお参りするということで、政府が小中学生を動員した。だから、ふだんよりは人は多かったけれども、鎮の書記が言つている20何万人も来たはずがない。「何でここを国際観光都市にできるんだ。お笑いでしかない」と言つてました。そういう感じで、普通の庶民の人たちの生活が壊されていっています。

いま中国で、こういう強制的な立ち退きが広い範囲で起こっているのです。わけのわからない開発や、ゴーストタウン、全然入居者がいない町もたくさんできていると言われています。

土地取引が地方政府に利益もたらす

「土地財政」という言葉があります。何でしょうか。

中国は社会主义の国ですので、建前上、土地の公有制を崩していません。けれども、都市部では土地や不動産の使用権が市場で流通し、地権者はそれらを自由に売り買ひできます。つまり、都市部の土地・不動産は実質的にはすでに私有化しています。使用権は住宅地70年などの有期で契約する、日本でいう定期借地権のようなのですが、契約更新によって継続できます。

農村部の土地は村などの集団が所有しているため、農民は土地経営請負権を持ちますが、それを自らの意思で売却したり、抵当に入れたりはできません。食糧生産のため、農地の転用も厳しく規制されています。ただし、「公共の目的」があれば政府が収用し、集団所有から国有にする手続きを取つたうえで、非農業用地として開発できます。

企業や個人が収用された土地の権利を取得する場合、土地使用権譲渡金や各種税金を地方政府に支払わなければなりません。1994年の分税制施行に伴いこれらが地方財政に組み入れられるようになると、地方政府は大量の農業用地を非農業用地に転用しました。現在、こうした土地・不動産関連収入は地方財政の4割をこえています。その上、「公共の目的」が法律ではつきりと規定されていないため、多くの地域で乱開発が進んでいます。

中国経済は今後どうなるかと心配されています。地方政府は土地を取り引きする中でいろんな利益を手に入れ、わけのわからないプロジェクト

に、それもシャドーバンキングを通じて借錢して箱物をばんばんつくっていく。観光客も全然来ないような、リターンが全く見込めないようなものをたくさんつくって、借錢を返せなくなるというようなことが、全国各地でどれぐらいの規模まで広がっているのかわからないのです。

日本でもバブルの時代に不動産の開発で借錢がたくさんできたけれども、中国の場合、その原因が戸籍制度といいびつな制度に関係している。都市部の土地制度であれば、こういうことは起こらない。地方財政に土地使用権譲渡金が入らないし、地方政府がそういうものを頼りに自分たちの経済規模を拡大しようとはしないわけです。

中国社会を見るとき、都市と農村の格差が、特殊な制度のもとに起きていることを見なければいけない。それが中国を不安定にさせる要素でもあるけれども、ある意味で均衡点を見出すというか、安定させ、コントロールする道具にもなっています。両方の側面があることを、お話ししたいと思います。

都市に住んでも市民権は与えられない

戸籍制度は 1958 年から、毛沢東の時代から今に至るまで続いている。その当時は、農村の人たちは人民公社に所属して、集団で農業を行っていました。都市部の人たちは配給制度があつていろんな食糧を安い値段で入手できるし、それぞれが属している「単位」で、大学を卒業したら仕事を配分され、家を配分されていた。農村から都市に移動することは極端に制限され、特別な目的がない限りできなかつたのです。

大学に合格すると農村から都市へ行きやすい。都市部の大学に合格して、卒業後そこに残って就職して、ホワイトカラーとして働くことがいちばん近道だったわけです。ただ、学齢人口の 2%か 3%くらいの人しか大学に進学できない時代でしたので、そう簡単ではなかつたのです。

50 年代から続いている戸籍制度が、いま市場経済が発展している中で、なぜ維持されているのでしょうか。

いまは基本的に移動が自由になりました。農村から都市にはほとんど制限なく移動できます。都市部に行って工場で働きたいと言つたら誰も止めません。昔は暫定居住証を申請しなければいけなかつたけれども、いまはそういうものがなくとも問題なく都市部で生活したり、仕事をしたりできます。

ただ、生活し仕事をする中で、都市にもともと

住んでいる人たちと同じような権利は与えられない。病気の治療で保険を使おうにも、戸籍のない都市では自己負担率が高くなります。子供が学校に行きたいと言っても、追加料金を払わなければ都市部の学校に入れてもらえない。

市民権が与えられないから、宙ぶらりんのような状況で都市の周辺部にいる人たち、いわゆる農民工という人たちが増えてきた。都市と農村を行ったり来たりする、都市部にいるときは市民権がなく、不安定な状況にいる人たちが 2 億人以上います。日本の人口よりも多い数の人たちがそういう状況になっているのです。

湖北省の農村を 10 年以上定点観測

では、農村の状況はどうでしょうか。

私はここ 10 何年、湖北省の農村を定点観測しています。そこは都市へ出稼ぎに行く人たちが多い。特に若い年代の人たちが行つてしまふので、残っているのは年をとった人たちが多い。空洞化というか、いろんな問題を抱え始めている。

<写真>これは 10 年前の写真ですけれども、私たちが車に乗って調査に行こうとしたときに、道路を横切るように穴があいていたのです。このストライプのシャツを着ているおじさんは、この地域につくられている村民小組の組長さんです。本当は地域のまとめ役であるべき人が、自分の農地から、前の日に大雨が降ってたまり過ぎた水を排水したいからといって、公共の道路に勝手に溝を掘って排水しようとしていたのです。

私といつも一緒に調査で協力してくれる先生が警察に電話しました。公共の道路に穴を掘っているよと。でも、警察官も来てくれない。警察もこんなことでは動かないし、本当ならばまとめ役をするような人たちが、公共のものを破壊してしまうという状況が起つっていました。仕方がないので、穴を埋めて、何とか通つたのですけれども。

ちなみに、10 年たつたいま、この泥だらけの道路は、中央政府や省からの補助金で全部セメントで固められ、雨が降ってもこういう状況になることはありません。当時は、こういう道路建設に上からの補助金がほとんどおりてこなかつた。

私もいろんな農村を調査しましたが、道路をみれば、その地域の人たちが団結しているかどうか大体わかるのです。道路が汚い地域の人たちは、自分たちの地域をよくしようという気持ちが薄いというか、あまり地域に目が向いていない。出稼ぎにどんどん出てしまつて、貯めたお金で村に帰つて家を建てようというようなことは全然考

えていない。この地域はそういう典型的な地域なのです。

利害ぶつかり進まぬ水利事業

2003年なので10年前ですが、ここで日本政府の草の根無償資金協力による農業灌漑事業をやったことがあります。

この地域ではお米をつくっていますので、大量の水が必要です。毛沢東の時代に自力更生でつくった大きな灌漑施設があるけれども、もう使わなくなっている。ちゃんと修理して、みんなが使用料金を払えば使えるようになる。けれども、水の問題が難しいのは、水源から近いか遠いかで水利条件が異なります。自分の持っている農地は水源から近いので、雨がたくさん降る時期には、ポンプ場、灌漑施設を使う必要がないという人もいる。そうなると、お金を払わない人が出てくる。地域で協力して、いろんな費用を一括で徴収して、みんなで維持しようという態度がなければ、水利事業はうまくいかない。そういうのを改善できないかと、灌漑施設のハードの修復と、住民同士の協力体制をつくるということを、プロジェクトでやろうとしました。

＜写真＞これは全体で1,000万円規模のお金を、どういうところに使おうかと話し合っている会議です。村の人たちの関係を強化するために行うプロジェクトですので、湖北省武漢にある大学の研究者や大学院生がよちゅう出向いて会議を開き、村の人たちの意見を聴取してプロジェクトと一緒に立ち上げるという積み重ねです。けれども、お金があっても利害がぶつかってしまうので、結局うまく使えないのです。特に灌漑事業はそれぞれの条件が大きく異なるので、とても難しい状況でした。

修理に使うブロックや建築資材を置いておくと、すぐに盗まれてしまうので、夜、誰かが寝泊まりして見張るということもありました。

＜写真＞ポンプ場を修復しても、皆さん、ポンプ場を使わない。自分で小さい井戸を掘って、長いビニールホースを引いて、水を入れている。ポンプ場を使って水路をきちんと整備していけば、短い時間で広い範囲に灌漑ができるのですけれども、私たちが調査した水路などは、草がぼうぼうに生えて、ザリガニがたくさんいて、水が通らない。なかなか使えない状況になっているのです。

この地域は、年によって降雨量が多いときとそうでないときがある。急に降雨量が少なくなると枯れ果ててしまい、逆に多過ぎると水量をコント

ロールできず水に浸ってしまう。灌漑施設をしっかりとつくって水の量をコントロールすれば、もっと効率よく、お米の生産高も上げることができます。

この辺のお米の生産高は、そんなに下がっているわけではなく、ある程度キープしている。水をうまくコントロールしているからではなくて、肥料を大量に使うからある程度は生産高を維持できている状態で、あまりよくないです。専門家の人に聞くと、化学肥料によって土の力が落ちている。短期的には生産高をある程度維持できたとしても、化学肥料に頼るのはよくない、と言っていました。

権限減り仕事しない役人たち

＜写真＞ここは村役場です。中国では村といつても、いろんなレベルがあって、行政村と自然村があります。自然村とは、いわゆる集落です。その自然村が幾つか集まって、行政単位の村がつくられる。ここは、約1,200人の人口で、そんなに大きくなない行政村の村役場です。

役場の掲示を見ていたいたらわかるように、村がやる主な事業は計画出産。子供が2人以上いないように、統計をきっちりとて確認する。ここは2人子どもがいる家はほとんどない。村が厳しく監視しているからというよりは、2人以上いると教育費もかかり大変だという現実的な観点から、2人も要らないという人が多いのです。それでも、計画出産の資料はきちんと整備されている。

90年代、2000年代の初めぐらいまでは、農業税とか、いろんな費用の徴収も村がやっていたのですが、お金を徴収する仕事をもうやらなくなってしまったのです。90年代には、お金を徴収する権限が村にあったので、農民から収奪するというか、必要なないような費用まで農民から取り立てて、トラブルのもとになっていました。けれども、中国政府が農業税の廃止を2004年に決めて、それ以降、村はそういう権限を持たなくなった。

そうなると、村の役人たちもメリットがない。自分たちがお金を徴収する権限を持っているときは、いろいろと村の人たちと関係を持つことで利益があったけれども、最近はそういうことがあまりなくなってしまった。

先ほど紹介した山東省の村などは不動産業者が入ってきて、村が土地の権限を譲渡することで、いろんな収入を得ることができるのですが、こういう土地資源が乏しいところ、伝統的な農業しか

ほとんどやることがなく、都市からかなり離れている農村は、村の持っている財産がすごく少ないので、村の役人たちが公共のいろんな仕事をやろうとしないのです。だから、水利事業なども、うまくいかない状況になっています。

＜写真＞私たちは灌漑事業をやった後に、高齢者のための活動センターをつくるプロジェクトもやりました。子どもの数が減っているので、小学校が廃校になったり統合されたりしているのですが、ここも使われなくなった小学校の跡地を、高齢者の方々が集まれるような形で整備し直したのです。

なぜそういうことをしたかというと、中国も農村では高齢化が進んでいて、若い人たちはどんどん出稼ぎに行ってしまう。出稼ぎに行った先でも、若い人たちが安定した生活を送れるわけではないのですが、なかなか帰ってこない。残っている高齢者の人たちが農村をよくしていくパワーを持っているのではないかと、こういうセンターをつくりました。

おもしろいのは、村民委員会（村役場）や、村の共産党支部委員会が、勝手にここに引っ越してしまった。村役場は部屋が少なく、汚くてぼろい。私たちは廃校になった小学校ですけれども、手をかけて心地よい空間に作り変えた。皆さんが楽しめるような空間をつくりました。そこに役場の看板をかけてしまった。武漢の一绪にやっている先生が「すぐに外せろ」と怒った。「ここは政府が中心になってつくったものではない、老人たちが中心になって自主的にいろんな活動を組織しようとしているので、勝手に政府がここに来るのはおかしい」と、退いていただいた。こういうところには、すぐに介入してくるのです。

農村も地域によって条件が違う

中国というのは本当に難しい国で、村と一言に言っても、いろんな条件の地域があるのです。

私が紹介したのは中部の農村地域で、都市部からかなり離れていますので、地価の上昇もほとんどないのです。農業以外の産業がほとんど発展していないので、高齢化も進んでいますし、若い人たちが外に出ていってしまう。いま紹介したように公共事業が停滞している。村で中心的な役割を發揮すべき役人の人たちも村の事業に関心を示しませんし、いろんな形で住民同士のトラブルがあったときに、警察官とかが来てくれません。いわゆる「黒社会」と中国語で言うやくざみたいな闇組織がかなり暗躍していて、そういう人たちが

お金や暴力で解決を図ることも多いのです。

私もいろいろな家族にインタビューしたけれども、離婚率が異常に高い。離散家族というか、お父さんだけ出稼ぎに行っているとか、お父さんもお母さんも出稼ぎに行っているけれども違う工場で働いているとか、子どもだけが残っているとか、そういう状況が多い。その間にどっちかが不倫をしたとか、連絡がとれなくなったとかいうこともかなりある。

こういう地域は、行政が責任を果たそうとしないという問題もあります。それでも中国には、昔ながらの人づき合いの中で助け合いがかなり行われる地域もある。例えば、ここよりも所得水準で言うと貧しい雲南省の村なども私は調査していますけれども、道路などもっときれいに整備されている。地元の人たちが交代で道路を管理するメカニズムをつくり、昔ながらの関係がうまく機能している。そういうことも、こういう地域はなかなか維持できなくなっているのです。

一口に農村といつても、大きく分けて二つあります。若い人材が外に流出してしまって、村 자체も持っているいろんな財産がほとんどないような地域と、山東省のさきほど紹介した村のように比較的都市部に近いところで、土地資源に目をつけた地方政府が開発業者に転売してしまうような地域もあります。山東省では、村が勝手に農民たちを立ち退かせて、その権利を民間の企業に譲渡してしまいましたけれども、村の人々の力が強いところは、そうはさせないと権利を守っているようなところもあります。もっと貧しい地域で、農村として地域の中でのネットワークがうまく機能して助け合いができるようなところもあります。

都市部にいま「城中村」というところが結構出てきています。若い人たちが農村から都市に出稼ぎに行きますけれども、給料はすごく低い。地価が高騰して、家を借りようと思ってもすごく高い。そういう若い人たちが住むのは、本当に安く住めるところなのです。戸籍を持っていない人たちが集住していますので、ごみ処理とか汚水処理とかを行政が後回しにします。スラムまではいかないけれども、とても汚い。

中国は、大きなイベント、例えばオリンピックとかがある時に、そういうエリアから一齊に立ち退かせたりするので、スラムがどんどん大きくなることはほとんどない。けれども、農村の戸籍を持ちながら都市に住んでいる人たちの住むところがぼつぼつと残っています。

もう一つは、先ほどの山東省のような地域で、村の人たちの意識が強くて、立ち退きの目に遭いたくない、地価がどんどん上がっている中で自分たちの土地の権利を大事にしたいと、農村という土地の登記状態を変えないまま、勝手に都市化してしまう地域もあるのです。

中国は食糧生産、自給率をある程度維持しなければいけないので、農地の転用は厳しく規制しています。けれども、農民が適切な手続きをとらないで、民間の企業と手を結んだりして、高層ビルを建てたり、ショッピングセンターをつくる。登記簿上はまだ農村になっているから、レンタル料みたいなものが農民に入っていくというような地域がかなり増えているのです。北京の郊外などにも、そういう高層マンションがたくさんある。

それらの不動産物件は中国語で「小產權」、小さい財産権と呼ばれています。厳密に言うと違法物件です。けれども、中国の法律もそれぞれ矛盾する法律がたくさんできています。政府も小產權の規模があまりにも大きくなり過ぎてしまって、取り締まろうにも取り締まりがなかなかできない。言ってみれば黒に近いグレーの物件がたくさん出ているのです。

そういうところの農民は、ある意味で賢いといふか、農民という権利、戸籍を利用して、土地の利益をほかに渡さない。自分たちのところに残そうとしているわけです。

一言に農民といっても、戸籍がプラスに働くようなケースもあれば、都市部に行っても市民権がもらえないという不利な状況に置かれることがあることもある。

もう一つ見なければいけないのは、「農民工」と言われる人たちです。皆様の頭の中では、工場などですごく安い賃金で働かされている、かわいそうなブルーカラーの人たち、というイメージがあるかもしれないけれども、農民工もいま、いろんな種類の人たちがいると考えたほうがいい。

中国語で「知識民工」という言葉も出てきている。農民という身分は変えられないけれども、都市部でホワイトカラーとして働いている人たちも結構ふえている。大学を卒業して都市部で就職していくても、上海とか北京とか大都市の戸籍は取るのがすごく難しい。多くの人が列をなして待っている状態です。ホワイトカラーであっても、条件のいい人が優先されて、戸籍がなかなか自分たちの手元には回ってこない人たちも出ている。そういう人たちはブルーカラーではないけれども、まだ農民です。

小さい規模の都市出身の人で、大規模な都市の戸籍が取れないというケースもあります。

戸籍地ごとに大学合格者の枠に差

皆さんは、ちょっと不思議だなと思うかもしれません。戸籍というのは何ですか、そんなに大事なですか、北京や上海の戸籍を取りにくいというけれど、何が問題なんですかと。日本の感覚から言うと、例えば私は大阪出身ですけれども、東京に来れば、すぐに住民票を移して、図書館でも病院でも普通に使えるわけです。どうして中国ではそれができないのかというと、あまりにも大きな格差があるわけです。

たとえば、生活保護の額を見ればそうした事情は一目瞭然です。2012年的生活保護費は上海市で月収1450元以下の貧困家庭に対して月に570元でした。これに対して、私が長年調査している湖北省の沙洋県は平均的な農村地域ですが、年収で1500元以下の人に月300元が支給されています。つまり、沙洋県の農村戸籍を持つ人が上海市へ移住すれば、多くが生活保護の対象者となります。

もう一つは、子どもの教育です。北京、上海は大学が集中している地域で、各大学は合格者数を設定するときに、戸籍地によって決めるのです。北京大学は今年、北京の戸籍を持っている人は200人受け入れましょう、上海の戸籍を持っている人は100人受け入れましょう、というふうに戸籍地で人数が決まるのです。

合格点数が北京大学は550点で、全国統一ですという形にはなっていない。北京や上海は入試問題自体も独自につくっているので、点数を一律に比較できないようになっています。でも、多くの人が言うには、北京や上海の戸籍を持っている子どもたちは、大学にすごく入りやすいと。

出稼ぎで北京や上海に来ているお父さん、お母さんについてきている子どもたちが、一部ですけれども、北京や上海の戸籍を持っている子どもたちと高校で一緒に机を並べて勉強しています。そういう子どもたちも、大学入試を受けるときは、戸籍地に戻って受験しなければいけない。高校では自分のほうがずっと上の成績だったにもかかわらず、戸籍地に戻って試験を受けたら、自分よりずっと下だった成績の北京、上海の戸籍の子どもたちが自分よりずっといい大学に合格している。自分はすごく下のレベルの大学しか行けない、というような事例がどんどん出てくるわけです。

ネット上で、おかしいじゃないか、裁判に訴え

ると言っている子どもたちもいますが、そういう裁判はできないのです。

「異地高考」という方針を中央政府が打ち出しました。「高考」とは、大学入試という意味です。大学入試を戸籍がないところでも受けられるようにならうと、今年1月、日本の文部省に当たる教育部が各地域に新しい政策をつくるように指示しましたが、前向きな改革案を出したのは、ほとんどが出稼ぎ労働者を都市部に送り出している地域でした。そういうところは、ほかの地域から受けに来てくれてもいいわけですね。

上海市、広州市、さらに北京市は、軒並み基準を緩めない。例えば上海は、居住証Aの所持者で高校を上海で終了していれば受験可能です。

戸籍を取る前段階の居住証にもA、B、Cとあって、居住するために発行される。犯罪歴がないか、所得がどれぐらいの水準か、税金を何年間にわたってどれぐらい払っているか、勤めている企業はどれぐらいのランクか、そういうもので点数化して、あなたは居住証Aをあげましょう、居住証Bをあげましょう、居住証Cをあげましょう、とランキングをつけられる。戸籍はその上にあるわけです。居住証Aを持っていても戸籍が取れるとは限らない。居住証Aを取るのもすごく難しいと言われていますけれども、親がそれを持っていて上海で高校を卒業していないと受験できない。かなり厳しい条件になっている。

広州市も同じようにポイント制がある。「高技能人材」という認定があって、そういう人たちの子どもであれば、職業学校だったら受験していいですよ。普通のメインストリームの大学は広州では受験できませんよと。北京も同じく、中等職業学校とか、高等職業学校、普通教育を実施している大学の受験は、戸籍がなければダメですよ、となっています。

北京は、特に入試特区と言われている。2012年に北京の戸籍を持っている人たちで大学受験したのは7万3,000人ですけれども、そのうち北京大学に合格したのは614人でした。その北京から飛行機で1時間半で行ける河南省では、82万5,000人が受験して、そのうち北京大学が合格を出しているのが108人だけなのです。受験生は10倍以上なのに、合格者は6分の1。河南省は農村で条件が悪いから、学力が高い人は少ないんじゃないの、と見るかもしれません。そうだとしても、これだけ差がつくことはあり得ないと思います。

山東省は55万人が受験して、72人しか北京大

学に合格できていない。清華大学も同じで、北京では203人合格して、河北省とか安徽省では50人、60人ぐらいなのです。ですから、北京は圧倒的に自分たちの地域の戸籍を持っている人たちを優遇している。

北京には役人の子どもや上場企業の子どもがいて、自分たちの子どもにとって有利な制度を、不利に変えたくないという面もあります。去年、ネット上で話題になったのは、「異地高考」ということで、北京の親御さんたちが、自分の子どもたちは北京の戸籍はないけれども、長いこと北京で高校も中学も行っているから、受験をさせてくれと陳情しました。陳情に来ている親御さんたちが何人か集まっているところに、北京の戸籍を持っている親が来て、言い合いになって、けんかしているところがネット上にアップされたのです。

北京の戸籍を持っている親からすれば、北京の戸籍を持っていない子どもたちがどんどん北京で受験できるようになれば、自分たちの子どもたちは将来的にいい大学に行けなくなる可能性もある。とても危機感を抱いて、そういう衝突が起こっているのです。

放置できない農村と都市の格差

戸籍改革を中央政府も地方政府もやろうとしているけれども、そんなに簡単にはいかない。農村といつても、いろんな条件の地域がありますし、抱えている状況もそれぞれ異なる。

では今後、どうなっていくか。やはり中国は農村と都市の問題を解決していかざるを得ない。衝突をそのまま放置しておくわけにはいかない。条件の悪い人たちの声を聞いていかなければいけないというのもありますが、最近、新しい指導部は「新型都市化」という概念を打ち出しています。

いま中国社会科学院などが発表している都市化率は50%を超えたと言われている。この都市化率でよく言われるのは、土地は都市化しているけれども、人は都市化していない。都市にたくさん的人が流入してきているけれども、その人たちの多くが市民権を持たない。そういう宙ぶらりんの状況を変えていく、戸籍制度の矛盾を解決するための都市化が必要だというのが一つ。

もう一つは、先ほど紹介した、土地の所有制度が都市と農村では異なるので、すごくおかしな状況が起こっている。例えば北京でも、土地の登記上は農村になっている地域がある。そういうところでは、農民の人たちが、「公共の目的があるから立ち退いてください」と言われたときに、も

らえる補償金が10分の1とかになってしまふ。だから、もしその土地が都市の土地、国有の土地だとして、使用権をそれぞれの住民が持つていれば、まるまる自分の手元に入るお金が、農村の土地の場合、村、集団が所有権を持っているので、仲介する村や、その上の政府が土地の譲渡金を企業から受け取る。そこから補償金を一部農民の人たちに渡すけれども、ものすごく額が低くなってしまう。だから、歩いて3分とか5分でも、不自然な感じに補償金の額が違つたりするわけです。

北京ではそういうことはもうできなくなっている。本当に農村の登記だからといって、そんな低い額でしか補償金を出さないということは、皆さんのがあるので、もうできない。けれども、例えば四川省では結構そういう問題が起こっている。農民に対して低い土地の補償金しか渡さないのはおかしいじゃないかと。そういう土地制度も変えていこうという流れで都市化が議論されています。

もう一つは、経済発展をどうするかということです。土地に依存して地方財政がつくられてきた。その結果、何が生じたかというと、ゴーストタウンみたいな、わけのわからない開発がいろんなところで行われている。不良債権とかシャドーバンキングの問題なども出てきている。そういうことを続けていけば本当にバブルが崩壊しかねないので、そういうあり方を考え直さなければいけない。いま、そういうバブルみたいなことが起こっているのは、内陸部の農村が多いです。

中国の経済学者が、北京の人口密度は東京の半分以下だが、生産高は8分の1だと試算しています。地下鉄などはすごく整備されているけれども、通勤圏を拡大して地上の公共交通を整備すれば、もっと効率よく人々を集中して住まわせることができて、都市化を効率よくできるのではないか、大都市、中都市、小都市に分けて都市建設のあり方を変えていけば、GDPをもっと押し上げる力になるのではないか、というようなことが議論されているのです。

それが、ある意味で新政権の売りにはなっている。では、だれが大都市に住めるのですか、だれが中都市に住めるのですか、ホワイトカラーかブルーカラーで分けるのですか、それとも犯罪歴とか所得水準で分けるのですか。自分がどこの戸籍を持っているかによって、中国の人たちは得ることができる社会保障や公共サービスが大きく異なる。一概に都市化しようと言つても、大都市、中都市、小都市と分けたとしても、いろんな利害

の衝突が出てきてしまうので、そんなに簡単にはいかないのではないかと言われています。

たくさんの問題があるので、1時間ではしっかりと説明し切れなかったのですけれども、わからないところや質問がありましたら、どうぞ教えていただければと思います。

《質疑応答》

司会 ありがとうございました。質疑に入ります。必ずしも格差の問題でなくても結構ですが、ご質問をいただければと思います。

質問 中国の政治、社会の構図をみていると、既得権益層の不当な利益確保に切り込んでいくのは非常に難しいと聞きます。例えばダムなど電力の分野だと、李鵬一派が公権力を押さえている、そこに公正な競争メカニズムを働かせるのは難しい。切り込もうとすると政治的な対立も生んでしまう。この農民の怒りを静めるには、そういう政治面での既得権益層との対立が障害となってくるのかどうか。政治面での対立みたいなものがあるのかどうか。

2点目の質問は、中国社会を見ていると、権力者の不正や腐敗で直接的な不利益を被っていない人たちの間にも、中国の社会構造に対する怒りが日に日に高まっている印象を受けます。阿古さんはどういうご見解なのか、聞かせてください。

政治的な力で権益に切り込む必要

阿古 既得権益層は、電力とかエネルギー関係、国有企業で持っている権限を放さない。

例えば、私が貴州省の農村を訪れたときも、大きなダムを建設していて、その人たちが立ち退かされた。農民の人たちが得るお金は本当に少し、これっぽっちかという安いお金で立ち退かされる。どう生活を立てていいかわからないような額しかもらえない。一方で、地方政府と企業に入るお金はものすごく大きい。

だから、大きな枠組みを変えなければいけない。政治的に力を持っている人がどんどん既得権に切り込んでいく、それを変えなければ何も変わらない。

それが2つ目の質問にもつながります。貴州の農民のように直接的に立ち退かされた人でなくとも、いろんなところで類似した問題が起こっていて、そういう状況を客観的に見ることができる

人たちも増えている。

私が北京で聞き取り調査をしている弁護士さんなどは、そういう弱い立場にいる人たちを法律面で支援する活動を続けていて、役人の給与を公開すべきだと言います。

この間、執行猶予付きの死刑判決を受けました鉄道部の元部長は、374の不動産物件を所有していました。なぜ、一役人が何百戸もの物件を持っているのか、汚職のレベルがあまりにもひどい。薄熙来の問題でもそうですが、そういういろんな情報がネット上にも流れようになってきた。自分が直接的にかかわる問題だとそこしか見えないけれども、ちょっと引いて大きな視野でみると、中国ってこれだけ腐敗を生む構造があるのだ、権力の暴走、乱用を監視できないメカニズムが問題だと気づき始めている人たちはいると思います。そんなに多いとは言えないし、弁護士さんとか、ある程度専門的な知識を持っている人がいまは中心ですけれども、そういう人たちが街頭に立って、役人の給与を公開せよという運動をしようとする。もちろんつかまってしまいますけれども、そういうこともかなり行われるようになつてきました。

質問 内陸部は、経済発展に伴ってどう変わつていくとお考えですか。それとも、戸籍制度がある限りは何も変わらないのか。北京や沿岸部から徐々に内陸の都市が発展していくことによって、農民の生活に変化が出るのかどうか。

富の集中が続くと全体の発展はない

阿古 内陸部の農村が発展するかどうかは、中国の今後を考えるうえで大事な問題です。山東省に行ったときも暗い気持ちになったのですけれども、地方政府が土地の制度に頼らないと財政にお金を入れることができない状況が続いているわけです。権力を監視するメカニズムがないから、お金をポケットに入れてしまう役人もいっぱいいる。腐敗が深刻です。そこを切り込んで変えていかない限り、豊かになるのは腐敗した役人とか、わけのわからない不動産業者ばかりなのです。人々は貧しく、苦しい立場に追い込まれるばかりで、結局、土地がなくなった農民はどこに行くかというと、都市部でスラム街に住むとか、売春をやるとか、追い込まれていく。

都市化するのは大事かもしれない。GDPを押し上げようと思ったら、農業だとなかなか上がらない。第二次、第三次産業を発展させる。農村部

で加工業を発展させるのも一つですけれども、都市を中心に経済的な発展をするのが、効率面から考えてもいい。既得権を持っている企業以外の、もっと民間的な活力を活性化するのが大事なわけです。

中央の指導者がどこまでそういう目を持って切り込めるか。恣意的に一部の人たちに富が集まるような形を続けていると、全体の発展は加速できない。中国は大きい国ですので、農村の食糧生産も維持しておかないと、輸入に頼って食糧価格が高騰し、全体的にインフレも進んだりします。そういうところまでバランスよく見られるか、切り込めるか。大きい国ですので、中央政府も地方になかなか切り込めないが、そこがやはりポイントだと思います。

質問 格差や行政の汚職のため、地方の不満はかなりたまっていると思います。いろいろと衝突も増えていると聞いておりますが、実際に現場へ行かれて、彼らの不満がどの程度のものなのか。それが地方政府に向いているのか、それとも中央に向き始めているのか。また、その不満が横の連携につながっている状況なのか。

経済が下向くと不満層の連携も

阿古 まさに私もそこが知りたい。研究者としても、そこをどう判断するか、いろんなところから考えようとしています。

よく言われるのは、中国の場合、立ち退きや環境汚染に苦しんでいる人たちが地方の裁判所に訴えても、裁判所の人事権も予算権も地方政府が握っているので、地方政府に不利な判決を出さなかつたり、逆にわけのわからない罪をでっち上げられて、環境汚染を訴えている人がつかまつたりすることもしそうなことが起こって、地方では解決できない問題が多いのです。

では、中央に行けば解決するのか。「上訪（シャンファン）」という陳情制度があって、北京に行けば、そういう陳情者がたくさん集まっているエリアなどもある。北京オリンピックのちょっと前まで、すごくたくさんの人が住んでいるエリアもあった。お上にすがるような感じでたくさん的人が北京に集まつてくるわけです。そういう人々は、中央は地方とは違うと、ある意味で希望を持っていたわけですけれども、結局、北京に来て何回も何回も陳情しても解決しない。追い返されたり、地方から派遣された人たちが陳情に来ている人たちを連れ帰ったりする。中央も地方政府

とグルになって私たちをいじめているのではないかというような気持ちになったりする。

陳情の人たちが集まると、ほかの地域から来ている人たちと情報交換したり、弁護士さんたちを通じて相互に知り合いになったり、そういうこともある。だから、連携が少しずつ進んできてしまつた。しかし、中国政府はそういう横のつながり、ネットワーキングが一番嫌いで、そういうことに関する情報収集をものすごくやっている。

よく中国で「安定維持」を意味する「穩維（ウェイエン）」という言葉があります。穩維のために莫大な予算をつけて、人も配置して、横のつながりや組織化のかぎになる人たちを拘束したり、圧力をかけたりする。尾行したり、いろんな罪をでっち上げて逮捕したり、家族に対しても圧力をかけたり、ということもすごくやっていますので、なかなか連携が進みにくい状況もあると思います。

だから、経済次第だと思います。経済が落ちていけば、今まで不満を持っていなかつた既得権益層の人たちも、政府は何をやっているんだと不満を持つようになる。バブルが崩壊して不動産価格がどんどん下がつたり、インフレが深刻になつたり、今まで経済的に手を結ばなかつた階層の人たちが政府の政策に対して不満を持つようになれば、一気に連携が進む可能性があるので、変わっていくのではないかと思います。

ただ、その結果が、いい形で民主化に至るのか、それとも混乱に陥るのか。共産党政権がいまのような形で維持できなくなると、中国が混乱してしまう可能性もありますので、その辺は難しいところですけれども。

質問 社会保障の関係でお尋ねしたい。一つの都市の中にもいろんな戸籍の人が入りまじつて暮らしている中で、その皆さんには医療や年金で、どこに対して負担をして、どこから医療や年金のサービスを受けるのか。負担と給付について、いまどんなふうになっているのか教えていただけますでしょうか。

上海と農村の生活水準は天と地

阿古 社会保障は制度が複雑で、上海など大都市の制度と、もっと小さい都市の制度では、かなり差があるようで、自己負担率とか、企業が負担する割合とかの差もあります。

先ほどご紹介した生活保護のレベルは、湖北省の農村の平均的な収入を得ている農民の人たち

が上海に移住すれば、ほぼ全員が生活保護の対象になるわけですね。戸籍をどうして廃止できないかというと、あまりにもその差が大き過ぎる。上海の生活水準は農村の人たちとは天と地ぐらゐの差がある。

戸籍がなくても、工場で働いている人たちには、年金制度に入っている人もおります。小さい都市で働いていた農民の人たちがほかの都市に移るときに、そこの都市で掛けていた掛け金を持っていけない場合もある。日本は全国どこに移っても、年金制度は同じシステムで動いているから、どこで働いても変わらないけれども、中国の場合、都市によって条件がかなり異なるので、持ち運びができない。ポータビリティーがないのです。

そういうところもトップダウンで切り込んで、上海みたいなところは損しますけれども、もっと統一化すればいいと思うのですが、社会保障改革が進まないので。それぞれの地域、条件のいい地方都市がそれを手放さないので、変わらないのだと思います。

質問 中国はこれから少子高齢化が非常にスピードを持って進んでいくとも言われています。都市で長く働いている農民の人が老後にちゃんと年金をもらえるかどうか。

阿古 農村も養老保険制度が始まりまして、地方政府が掛ける分と自分が掛ける分で積み立てて、年金をもらえるけれども、額が少ない。月に5,000円ぐらいもらつても、上海では生活できない。農村では生活できるかもしれないけれども。

都市と農村を行き来している人たちからすれば、農村で養老年金保険などに入つても、親が老後、自給自足しながら小金をもらうぐらいならともかく、ちょっと大きな病気をしたり、都市部に移住したりすることを考えたら、全然足りない。1日、2日でなくなってしまうぐらいのお金しかない。だから、その辺はどうなのかなと思いますね。

司会 中国共産党は労働者と農民の党だと言われてきました。いま経済発展の中で、企業家を党に入れたりして、だんだんもうけの方角に行つているように見えます。農村における共産党政権のプレゼンスは、だんだん低くなっているのでしょうか。共産党政権が、都市というか、経済的な効率の高いところへシフトしていく、農村への関心がだんだん低くなっている状態でしょうか。

農村でまだ人気がある共産党

阿古 実は、共産党とか毛沢東の肖像画とかをかけている農家は、まだ結構あるんです。すごく不思議だと皆さん思われるかもしれない。いまの共産党政権は、弱者を保護する制度をつくろうとしていないわけですから。

反日デモのときでも毛沢東の肖像画を持って行進している人たちも多かった。市場経済の影響があつて格差がかなり拡大しています。昔のほうがよかつた、とノスタルジックに考える人たちもいると思います。

もう一つは、中国の政治をみるとよく言わるのは、右と左。リベラルな欧米型の政治改革とか、自由な市場経済とかをもっと推進しようという右のグループと、もっと中国的な特徴を持った経済や社会づくりをやっていくべきだ、外の勢力から中国はいじめられてきたという歴史的な経緯も踏まえて、もっと中国独自の路線を行くべきだという左のグループとが、大きく分けるとある。

日本で言うと、反対ですよね。保守的なグループは中国では左で、右は革新的なことをやっていくとする。

その中で左のグループは、所得水準が低い人たちの人気を集めているのです。もちろん格差が大きくなっている現状に対して不満を持っていることもあると思うのですけれども、もう一つは、政治的な争いの中で、左は、例えば薄熙来さんがやったいろいろな政治動員、赤い歌を歌おうというキャンペーンとか、毛沢東時代の歌や踊りをやらせて人気取りをしようともしました。

中国の人たちは、ネットで情報を自由に得られるようになってはいますが、受けてきた教育の影

響もあって、すごく素朴なのです。皆さんが農村に行けば、ああ、と思うかもしれません。いろんなことに対して批判的に思考できる人は、まだそんなに多くない。先ほど、不満を持っている人たちが増えて、弁護士さんとかいろんな人たちを通じて、大きな目から社会の問題を見ることができる人たちも増えていると言いましたけれども、やはりすごく少数なのです。

多くの人は、まだ動員型の政治にすごく影響されやすいので、日本との関係もそうですけれども、中国の抱えている問題に対しても見方が狭い。大きな目から見ていろんな分析ができるところまで至らない。教育水準も低いですし。

ですので、共産党はあながち人気がないわけではない。農村でも結構まだ人気があるのです。

司会 定刻を過ぎましたので、これで終わりたいと思います。恒例の揮毫は、「順其自然」。どういう意味ですか。

阿古 私もそんなによく知っているわけではないのですが、四字熟語で、その道に従って自然に進む、あるべき姿を探す意味だと理解しています。結構難しいですね。自分自身もそうですし、日本もそうだと思うし、中国もそうだと思う。何があるべき姿なのか、自然に従って生きるというようなことですけれども、それを自分自身も模索しているところです。

司会 阿古さん、きょうはありがとうございました。 (拍手)

(文責・編集部)